様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０７４４

研究課題名（和文）軍都としての帝都東京ー明治・大正期を中心にー

研究課題名（英文）Imperial Tokyo as a military city :In the center of the Meiji and Taisho

研究代表者
荒川　章二（ARAKAWA, SHOJI）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等等の部局等・教授

研究者番号：３０２０２７３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、近年の軍事史研究の一つの特徴をなす＜軍隊と地域社会＞の研究の一環に位置づけられ、首都東京の軍都としての歴史的性格を解明することを目的とする。軍都研究は、昨今いくつの地域事例を積み重ねているが、首都圏・関西圏等の巨大都市の軍事的性格・特質に関する研究は、時期的にも対象領域的にも断片的成果にとどまる。本研究では、東京の、巨大都市圏の中枢（大阪と共通）、かつ帝都（首都、かつ宮城の所在地＝東京独自の性格）という両側面に注目しつつ、軍事都市としての形成期から大正・昭和初期の陸軍軍縮期に至る時期を主たる対象にして、軍都としての帝都東京の特質、変遷を明らかにする。

研究成果の概要（英文）：This research was placed in a part of the study of< military and local community> out of which one feature of the recent years' military history study is formed, and I had for my object to elucidate the historical character as the army capital in metropolitan Tokyo. Army Metropolitan study, but are stacked a number of regional case in recent years, research on the military nature of the mega-cities such as Tokyo and the Kansai region will remain the fragmented outcome in the limited target .
In the present study, in Tokyo, a huge metropolitan area of the central (Osaka and the common), and the Imperial City (the capital, and the Imperial Palace of the location = Tokyo own personality) in consideration of both sides that, until the Taisho period from the formative years as a military town time in the subject of, revealed the imperial capital Tokyo of nature and evolution as a military city.

研究分野：日本近代史

キーワード：軍都　帝都　陸軍

１．研究開始当初の背景

〈軍隊と地域〉関係史研究は、近々十年余の間に多くの成果を上げ、軍事史研究の一つの潮流をなしてきた。研究状況を示す最新の文献リストは、土田宏成『近代日本の「国民防空」体制』（神田外語大学出版局、2011.1）序章の詳細な注（P35）が参考になる。ここには掲げられていないが、坂根嘉弘編『軍港都市史研究Ⅰ舞鶴編』（清文堂、2010.1）を皮切りに、軍港地域史（海軍軍都）研究も組織的に始まりつつある。これら一連の研究は、総体として見れば、軍用地と地域社会、軍事化と都市化、軍隊の駐屯と地域経済、軍事演習と地域、地域行政の軍事適合化、軍隊と地域文化、戦死者の慰霊空間の形成など、社会の広領域に及ぶ軍事化の影響に着目し、軍事組織と戦時経験が近代日本社会を深くとらえていく様相を、多領域から解明しつつある。

申請者もこれまで、『軍隊と地域』（単著、青木書店、2001 年）において、静岡県及び愛知県の一部をフィールドとして、〈軍隊と地域〉関係史の方法を個別実証的に提起し、『軍用地と都市・民衆』（単著、山川出版社、2007 年）では、都市形成や地域発展と軍用地の展開との関係を全国レベルで概観した。また、論文「基地の起源と自治体・地域社会」（『都市問題』2010.11 月号）では、戦前と戦後の軍用地・軍事都市の継続・断絶両面の問題を提起した。このほか、「第六師団の歴史と地域社会」（熊本近代史研究会編『第六師団と軍都熊本』2011.3）では、戦前の軍都と呼ばれる都市群の中での熊本市の特質を考察した。

しかし、これらの研究蓄積の中で、大都市圏を一つの「地域」として設定し、軍事史的視角からアプローチした研究は、上山和雄編著『帝都と軍隊』（日本経済評論社、2002 年）のみであり、拙著『軍用地と都市・民衆』や土田前掲書が、部分的あるいは特定領域に限定してふれるにとどまっている。そして、上山編の集団研究は貴重な成果であるが、防空体制や東京周辺の軍事地域化に焦点が置かれており、「帝都」の軍隊の中枢をなす第一師団および近衛師団の編成や地域への影響などには分析が及んでいない。

したがって、両師団の形成過程、徴募のあり方、軍用地の取得を含む展開過程、定期検閲や各種演習（機動演習～特別大演習）の実態と地域への影響、戦時における首都の銃後形成の特質など、両師団を中心に据えての基礎的研究がまずは必要と思われる。

また、東京及びその周辺（千葉や埼玉）には、陸軍省・参謀本部や教育総幹部が管轄する多数の教育機関（例えば戸山学校）が集中していた。いうまでもないが、これだけの軍関係教育機関を集積した地域はほかにない。前掲「第六師団の歴史と地域社会」において、師団所在地での軍学校設置により士官層及びその予備軍の多大な集積がなされ、そのことが地域の文化や思想、学問研究、民衆意識にどのような影響を与えたのか解明すべきとの問題提起をしたが、この問題は、より広く東京について解明さるべき課題であろう。さらに、早い時期からの造兵廠（東京工廠）や兵器廠、被服廠など軍需工場の集積（軍需工場用地と職員・職工）も東京の特質（ただし、巨大都市に共通した特質）である。これら東京の軍事性を総合的にとらえることによって、他に比類のない軍都としての東京論を提起できると思われる。

２．研究の目的

本研究は、近年の軍事史研究の一つの特徴をなす＜軍隊と地域社会＞の研究の一環に位置づけられ、首都東京の軍都としての歴史的性格を解明することを目的とする。軍都研究は、昨今いくつの地域事例を積み

重ねているが、首都圏・関西圏等の巨大都市の軍事的性格・特質に関する研究は、時期的にも対象領域的にも断片的成果にとどまる。本研究では、東京の、巨大都市圏の中枢（大阪と共通）、かつ帝都（首都、かつ宮城の所在地＝東京独自の性格）という両側面に注目しつつ、軍事都市としての形成期から大正・昭和初期の陸軍軍縮期に至る時期を主たる対象にして、軍都としての帝都東京の特質、変遷を明らかにする。

３．研究の方法

ｉ　軍都研究の最も基礎的な作業として、東京圏におかれた陸軍の中枢機関（陸軍省、参謀本部など）、第一師団および近衛師団の師団形成過程とその後の展開過程を明らかにする。

明治期の軍用地面積を師管別に見ると（拙著『軍用地と都市・民衆』）、軍馬補充部用地を除けば、第一師管の軍用地面積は、官衙・兵営・練兵場・射撃場等すべてにわたり、他の師管を大きく凌駕し、演習場面積も第７師団を例外とすれば、最も大きなグループに位置する。そのことは、日本陸軍における東京の役割、そして全国で最も早く組織が整備され、さらに多彩な特別部隊（鉄道、電信、気球、飛行、自動車などの各部隊）がいち早く設置された両師団の特別な位置づけを反映していよう。

やや意外な感があるが、近衛師団関連部隊に関しては、当事者の部隊史はあるが、歴史研究は少なく、第一師団に関しては、東京という土地柄を反映してか、部隊史自体も乏しい。

こうした中で、旧陸軍資料、及び内閣資料（陸軍省関連）により、東京圏の陸軍組織の形成と展開を明らかにすることが第一の課題である。

ii　教育総監部が管轄する陸軍教育諸機関（一部は陸軍省）および陸軍省が管轄する工廠の形成と展開過程を、用地取得やその後の地域経済や住民との関係を含め、総括的に把握する。

iii　軍隊と地域の直接的で重要な接点として、平時における地域での演習（演習場における演習及び東京近隣の田畑山野を舞台とする秋季演習）、および戦時の出動（凱旋まで）と銃後の形成のあり方を追及する。なお、日比谷焼き討ち事件など治安出動という形態での軍隊と民衆との接触の多さにも、首都民衆の軍隊観との関係から留意したい。

iv　首都圏のメディアにおける軍隊関係の論説、意見などを系統的に拾い上げる。メディア先進地である首都から発信される軍隊観は、地域的な影響ばかりでなく、全国的な影響をも持つ。首都圏における軍隊観の形成を、その地域に存在した部隊との関連性から解明することは、他地域と比較して難しいだろうが、できる限りの作業を試みたい。

４．研究成果

研究成果は、およそ３点である。

第一は、報告者の編著『地域の中の軍隊　第２巻　関東　帝都としての軍都』（吉川弘文館，2015 年２月）の刊行に関わる。首都東京の軍隊の特質解明の重要な鍵は、明治初期の形成期にあり、近代日本の軍隊形成の最初の時期において、首都東京の軍隊が如何に位置づけられ、どのように部隊が配置され、そのためにどのように軍用地が創出され、どこから、どのような兵士が徴集され、如何なる錬成が施されたのか、そしてその結果、東京という地域と軍隊という存在が如何なる関係性、特色を形成したのかという点が問題である。こうした相関する諸問題を総合的に解明するために、とりあえずの分析対象を、日本軍隊の骨格が確立する過程としての 1870～80 年代に限定し

て同編著第一論文の拙稿をまとめた。

同編著は関東における戦前日本の軍隊を総括的に調査し、成果の論文とする共同研究として実施した。この関係で、報告者は東京に関する個別論文だけでなく、帝都を囲む関東地域全体の動向を概括する作業を並行して行い、同編著の長めのプロローグ「皇居防衛から帝都の護りへ」において、関東地域の軍隊の特質とその時代的変遷を概括した。また、小論として、日中戦争期に東京の軍施設が大規模に移転し、新軍都として設計されていった相模原台地の軍事化のアウトラインを提示し、日中戦争以降の帝都の新たな展開を見通した。本科研費研究は、大正期までに限定したが、その後への若干の見通しを付けた。

第二は、報告者ほかの編著『地域の中の軍隊　第８巻　基礎知識編　日本の軍隊を知る』（吉川弘文館、2015 年）において論考「陸軍の部隊と駐屯地・軍用地」をまとめたことである。

日本陸軍の創設から敗戦（軍隊の解体）までを部隊の編制、配置を中心に概括した論考であるが、東京あるいは関東の部隊の特殊性を検討する前提作業であり、基盤研究全体の基礎作業的意味をもった。日清戦後軍拡では部隊が増設されず（近衛師団徴募との関係）、それ故に第七師団への徴集兵配賦が行われる関東の徴兵の特質も浮かび上がった。

第三に、本科学研究費による研究の狭義の目的からすると外れて見えるが、首都東京･関東という日本帝国の中心の軍事化を、対馬・沖縄という周辺との対比において考察する準備作業を行った。経費は、職場の資金である。対馬や沖縄のような帝国の周辺との関係で首都東京と関東を考察する視点は、これも別の共同研究における台湾調査と韓国南部の海岸地帯調査によって、太平洋末期の植民地に及ぶ要塞地帯化への注目に発展した。戦争末期の防衛態勢は、沖縄戦、本土太平洋岸の防衛、千葉県・神奈川県などの首都防衛態勢の構築として考察されてきたが、こうした視座により、植民地を含む要塞化・防衛構想のなかで、帝国の要としての首都防衛態勢を位置づける構想として展開しはじめた。４年間の科学研究費による基盤研究は、当初の研究見通しを越えて、次の課題を明確に意識させるステップともなった。

なお、対馬については調査段階だが、沖縄の戦前軍事史､徴兵制の特質については、2015 年９月､『日本学叢書』（青弓社）に関わる研究会（於：南山大学）での発表機会を得、その後成稿に仕上げた。2016 年度刊行が計画されている同書に論文の一つとして掲載予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

荒川章二「〈軍隊と地域〉関係史の発見」、宮城歴史科学研究会『宮城歴史科学研究』第 70 号、2012、pp.1-19

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　２件）

荒川章二編『地域の中の軍隊 2　軍都としての帝都』吉川弘文館、2015、総頁 201 頁

荒川章二・河西英通・坂根喜弘・原田敬一編『地域の中の軍隊 8　軍都としての帝都』吉川弘文館、2015、総頁 247 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
荒川　章二（ARAKAWA　Shoji　　）
国立歴史民俗博物館　研究部　教授
研究者番号：
30202732

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者（　　）
研究者番号：